

異人たちの風景 : 『大いなる遺産』における境界領域をめぐって

著者	木原 泰紀
雑誌名	福井大学教育地域科学部紀要 第I部 人文科学(外国語・外国文学編)
巻	64
ページ	1-13
発行年	2009-01-20
URL	http://hdl.handle.net/10098/1898

異人たちの風景

—『大いなる遺産』における境界領域をめぐって—

木原泰紀

(2008年9月30日 受付)

I

『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1860-1) は境界をめぐる物語だと言える。何故なら、この物語の語り手／主人公のピップ (Pip) の足跡は一貫して境界領域を辿っているからである。まずは、この境界領域を概観しておこう。

物語冒頭の逃亡囚マグウィッチ (Magwitch) との出会いの場面は、川に接した沼沢地が舞台となっている。川が自然の境界であることは明らかであろう。事実ピップは、この川を「低い鉛色の線」(“the low leaden line”, 3) と形容しており、文字通り境界線の様相を明らかにしている。しかし、ピップにとってこの川は自然の境界というだけではない。このとき川を越えてやって来た逃亡囚は、「びっしょり水にぬれ、泥まみれになり、…いらくさに突き刺され、いばらに引っ掻かれ」、「一方の足に大きな足枷をはめられ」ている (4)。さらに、怒鳴り、ピップを逆さ吊りにし、カニバリスティックな脅しさえかけている (4-5)。この野獣のような姿は、ピップの生活圏から逸脱した、異質な場所からの侵入者としての様相を呈している。その意味では、かつて古代ギリシア人が、自らの地の外を押しなべて「バルバロス」と呼んだように、幼いピップにとっても、この川は心理的な境界であり、故に、彼の言い方を借りれば、この川の向こうの海は「野獣の巣窟」(“savage lair”, 4) なのである。また、この出来事が、夕刻から夜にかけて起こっていることにも留意したい (3)。昼から夜へと向かう夕間暮れは、正に時の境界を標していると言える。昼は、真理、秩序の支配する光の世界であり、一方夜は、怪異、混沌の支配する影の世界なのである。因みに、マグウィッチが捕縛され、監獄船^{ハルックス}へと再送される場面においても夕暮れが舞台となっている (38)。

次のピップの境界との関わりは、自らが境界を越えるという、越境者としての関与ということになる。鍛冶屋ジョー (Joe) の徒弟となったピップは、その徒弟生活の単調さに不満を覚え、「村や沼沢の境」(“the limits of the village and the marshes”, 124) を越え行くことを願う。そしてその願いが叶い、遺産相続人に選定され、ロンドンへと旅立つことになる。村境を越えると

き、ピップは次のような反応を示す。

...I had been so innocent and little there, and all beyond was so unknown and great, that in a moment with a strong heave and sob I broke into tears. It was by the finger-post at the end of the village, I laid my hand upon it, and said, "Good-by O my dear, dear friend!" (160)

先に広がる茫漠たる未知の世界は、少年ピップにとってなお、バルバロスとさほど大きな違いはないであろう。それ故、越境は只事ではなく、越境の象徴としての道標 ("finger-post") はこのような儀式的対象になり得るのである。さらに、忘れてならないのは、ピップの場合、この越境が階級の境を踏み越えることをも意味するということである。サティス・ハウスへの訪問の際にも、その門の通過は同様の、しかし擬似的な思いをピップにもたらしたことは想像できる。しかし、もはやこの越境は擬似的なものではない。この別れの言葉がピップの越境に対する覚悟を表していると言えるだろう。

ロンドンでの生活もまた潜在的に境界との繋がりを認めることができる。ピップは、上京後も何度か帰郷するが、その度にウッド・ストリートのクロス・キーズ ("the Cross Keys") という宿屋兼駅馬車発着所を利用している (エステラを出迎える場面でも登場する)。²馬車が空間と空間を繋ぐ役割を持つのだとすれば、駅馬車発着所は新たな空間の戸口に相当する。やはり境界を標すものであろう。また、ピップが何度も足を運ぶ弁護士ジャガーズ (Jaggers) の事務所はリトル・ブリテン (Little Britain) にあり、ニューゲイト監獄、バーソロミュー・クローズ (Bartholomew Close)、スミスフィールド (Smithfield) のすぐ傍である。かつて監獄はしばしば城壁に造られたが、ロンドン市壁にもいくつかの門の上に監獄があり、その一つがニューゲイトという門の上の監獄、つまりニューゲイト監獄である (中西 4)。また、バーソロミュー・フェアの開催地であったスミスフィールドは元来「ロンドン市壁のすぐ外側の平坦な草の茂った空間」であった (Weinreb 789)。市は境界領域で開かれることが多かったと言われるが (赤坂 68-73)、スミスフィールドの地はその事実を裏付けていると言える。

ピップのロンドンでの二番目の住居、テンブルのテムズ河畔のガーデンコート (Garden-court) は、物語のクライマックスの幕開けとなる場所である。その幕開けはマグウィッチの突然の再訪という形でもたらされるが、これはまさしくこの物語冒頭の場面の再現である。冒頭では、川に浮かぶ監獄船から境界を踏み越え現れたのだが、今度もテムズ河のはるか向こうの異国、オーストラリアから国境を越えやって来たことになる。グレイス・ムア (Grace Moor) は、ピップが監獄船に与えた「邪悪なノアの方舟」 ("wicked Noah's ark", 40, 230) という名辞は、当時流刑地であったオーストラリアにも当てはまると述べているが (17)、また同時に、「野獣の巣窟」という素朴な喩えも重ね合わせることができるよう思われる。再度のバルバロスからの到来であ

る。そして、この後はテムズ河を舞台に物語が進行していく。マグウィッチを逃亡させるために、ボートでテムズ河を下り、大^{コンティネント}陸行きの船に乗り込む計画を立て、実行するが、結局は失敗する。このテムズ河下りは、場所は特定されていないが、ピップの故郷を目指しているとも言えなくはない。事実、ピップは、ロンドン橋、ロンドン塔、ミルポンド (Mill Pond) を通り、さらにグレイヴズエンド (Gravesend) を過ぎたあたりで、「まるでわたしの故郷の沼地のような」場所にやって来たと言っている (438)。実際グレイヴズエンドの先はフー半島となり、ピップの故郷と考証されているクーリング・マーシュが見えるはずである。ピップ一行の泊まる宿屋も故郷のものなのかもしれない。その意味では、ピップの足跡は境界をめぐる円環的な軌跡を辿っていることになり、大局的に見れば、この物語全体がテムズ河畔を舞台に展開されていると言うことができる。さらに最後に、ピップはカイロへと旅立つことにより、自ら国境を越えることになる。かくしてピップは言わばエグザイルの相貌を帯び、境界、周縁に位置付けられた異人としての姿を一層明らかにする。

II

では、境界の意味するところとは何であろうか。勿論、二つの空間を区切るということになるが、境界が境界として意味を持つためには、客観的な視点は無意味であり、当然主観的な眼差しの中で捉えねばならない。すなわち、古代ギリシア人のように、内と外を分離するための、或いは「我ら」と「彼ら」を分け隔てるための装置である。エリアーデは、世界のイメージについて、「原初的、伝承的社会は周りの世界をひとつの小宇宙として認識する。この閉ざされた世界の最果てに、未知の、未形成の領域が始まるのである。一方には人が住み、組織を形成しているがゆえに宇宙と化している空間があり、他方、この親しまれた空間の外側には悪魔、怨霊、死者、よそ者の恐ろしい領界、つまり、混沌^{カオス}、死、夜があるのだ」と述べている (52)。このコスモスとカオス、つまり秩序と混沌の二分法において、自ずと境界が意識され、物理的にせよ、心理的にせよ、境界が作られるのである。かくして、境界は悪の力の防波堤であるが故に、また、中心の秩序から離れた周縁性という性格において、境界の周辺には負の要素が付きまとうことになる。それ故、前述したように、中世においては、城壁に監獄が造られ、また城壁の門の周辺に狂人、ハンセン病患者、ユダヤ人といった秩序世界から排除される人々の空間を割り当てたと言われている (赤坂 29)。これらの排斥される人々、すなわち異人たちと境界領域の関係は切り離せないものであり、彼らの集うこの空間は自ずと非日常性を帯びることとなる。

前述したように、ピップの故郷の沼沢地は、まさに境界の様相を色濃く滲ませていると言える。次の引用は、村の居酒屋にやってきた「見知らぬ男」(“stranger”) とジョーの会話である。

“I am not acquainted with this country, gentlemen, but it seems a solitary country

towards the river.”

“Most meshes is solitary,” said Joe.

“No doubt.... Do you find gipsies, now, or tramps, or vagrants of any sort, out there?”

“No,” said Joe; “none but a runaway convict now and then.” (76)

「ジブシー」、「放浪者」、「浮浪者」そして「逃亡囚」、これらの表象がこの沼地という空間に相応しい存在であることが読み取れる。そして、ピップに「見えない銃をもつ」と形容されるこの見知らぬ男も同類であり、異人の匂いを漂わせている。しかし、異人は常に剣呑なだけの存在ではない。社会学者ジンメル (Georg Simmel) は、異人 (“the stranger”) とは、言わば潜在的放浪者 (“the potential wanderer”) であり、共同体から疎外されつつも、共同体から完全に切り離されているのではなく、共同体と何らかの関係性を保持している存在として捉えている (143-4)。つまり、半ば排除されているが故に、彼らは外の世界との関係性を有し、外の世界との媒介者としての役割を果たしうるということでもある。その具体例は、行商人である。ジンメルは、異人はいたるところで行商人 (“trader”) として姿を現す、と述べている (144)。マグウィッチもこの見知らぬ男も無論商人ではないが、外から来た彼らが、ピップに金銭的な関係をもたらすことも事実である。マグウィッチは後にピップに「大いなる遺産」を、そしてこの見知らぬ男はマグウィッチに頼まれ、ピップに2ポンドをもたらすのである。

しかし、何より異人がもたらすものは、その非日常性である。「見えない銃を持つ男」は、後に再度、護送される囚人としてピップの前に姿を現すが、その様子が「非公式の興味深い見世物」 (“an interesting Exhibition not formally open”, 226) と喩えられている。裁判の大勢の傍聴人が「劇場の大観衆」 (“a large theatrical audience”, 457) に準えられたり、また当時公開処刑が大衆の最大級の見世物であったように、犯罪の世界と見世物の世界は近接的な関係にあったと考えられる。それは、その非日常性を帯びた異人としての共通項故^{ゆえ}ではなかったであろうか。その意味では、ピップが上京して、ジャガーズとの面会を待つ間、近くのバーソロミュー・クローズの様子を見て回る場面は、まさにその二つの世界が見事に繋ぎ合わされていることを伝えているように思われる。そこは、ジャガーズとの面会を求める人々で溢れているが、秘密めいた男たち、情婦、売春婦の類の怪しげな女性たち、そして、ジャガーズを讃える歌を歌いながら、ジグ踊りを踊り続けるユダヤ人など、³ 非日常性、カオスの香りに満ち溢れた異人たちの風景を見ることが出来る (166-7)。そして、忘れてならないのが、バーソロミュー・クローズとは、あのバーソロミュー・フェアの開催地であるということである。ここに、かつて様々な見世物などで賑わった^{いち}市の喧騒の微かな名残を認めることができるのではないか。⁴

見世物師たちの姿はこの物語ではほとんど登場することはないが、間接的に所謂ハレ (晴)、カーニバレスクの様態を垣間見ることができる。例えば、大法官が国璽を運ぶかのように、大きなビーバーの帽子を被り、買い物籠を提げ堂々たる行進を行うミセス・ジョー (Mrs Joe) の姿

(99-100)、或いは、ウォプスル (Wopsle) の朗読する物語 (リローの『ロンドンの商人』) の中に入り込み、主人公に成り代わって、ついに絞首刑になってしまうピップの悲劇 (117) など、日常が非日常化されるその瞬間が幾つか描かれている。とりわけ、「トラップの小僧」(Trabb's boy) はその道化的な役割において、異彩を放っている。紳士然としたピップを大げさな身振りや叫び声で揶揄する様子や (245-6)、「自分の用のないところならどこでも現れる」というその偏在性 (431)、ピップの危ない場面に唐突にやって来るデウス・エクス・マキナの役割など、彼は、この物語から遊離した存在として、まるでテキストの外に置かれているかのようなのである。パフチンに倣って言えば、世界は一様ではなく、第二の世界 (祝祭の、非公式の世界) が存在し (12)、彼は、その世界からやって来て、公式世界の秩序を擾乱し、混沌をもたらすかのようなのである。

とは言え、この物語における第二の世界、非日常の世界は、祝祭的な様相よりも、光の届かない影の世界の様相が色濃くことは明らかであろう。例えば、テンプルのテムズ河に降りる階段にいつもたむろしている「水陸両棲の者たち」(“amphibious creatures”, 434)、或いは、テムズ河口の宿屋にいる、水死人の靴を履き、「ぬるぬる、べたべたの」(“slimy and smeary”, 440)「なんでも屋」(“the Jack”, 440)。彼らは、まさに川という境界領域の住人であり、川の持つ、その異界性、その彼岸への入口という象徴性故、常に死の世界に片足を置いているかのようなのである。⁵ その意味で、この死の世界、影の世界と関係する異人の代表は、オーリック (Orlick) であろう。ミセス・ジョーの事実上の殺害者である彼には、異人に纏わる様々な表象が担わされている。まず、彼に付与されている「カイン」(“Cain”, 112) という比喩が、殺人者だけでなく、放浪者をも表しているのは明らかである。勿論、一緒に付されている「彷徨えるユダヤ人」(“the Wandering Jew”, 112) という比喩も同様である。そして、その名の通り、ジョーの下での鍛冶職人、サティス・ハウスの門番、石切り場の労働者、そしてコンペyson (Compeyson) の元でのスパイ、と一箇所にも留まることはない。また、彼の存在は常に境界との関連の中で見出すことができる。沼地の水門小屋に寝泊りし (112)、日曜を水門の傍で過ごし (112)、半休の日には通行税門の傍で (118)、さらにサティス・ハウスの門番として働き (232)、ピップと対決する石灰窯の場面も、暗い地平線を臨む沼地である (421)。さらに、最終的には窃盗の罪で監獄に入ることになる (466)。このように、境界領域の住人として、一貫して影の世界に位置付けられたオーリックだが、トラップの小僧と同様、彼にもこの物語世界の外からの視点を持ち合わせているかのように見える瞬間がある。石灰窯での対決の場面で、彼の口を通して、驚くほど詳しいピップ周辺の出来事が伝えられる箇所がある (428)。彼のコンペysonの元でのスパイ活動がその説明として考えられるが (ガーデン・コート) の暗闇の階段での遭遇など)、⁶ やはりやや唐突で、不自然な印象を感じざるを得ない。一つの見方としては、オーリックの全知の様相は、語り手の視点に似た、物語という境界を越えた外からの介在のようにも思える。しかしながら、ピップとオーリックの全知的な機能における同質性についてまた別の観点からも考えることができる。

III

やはりジュリアン・モイナハン (Julian Moynahan) 以来、衆目のほぼ一致した、ピップのダブルとしてのオーリックという考えに行き着かざるを得ないだろう。確かに、この物語におけるピップの自省的な、罪悪感に取り憑かれた様相から見れば、オーリックをピップの「歪んだ、暗い鏡像」(“a distorted and darkened mirror-image”, 67) と見做す考え、つまりマイクロコスモスへの着地のほうが妥当だと言えよう。

ディケンズは多くの、様々な所謂ダブルと見做しうる性格造形を行っているが、ピップとオーリックの場合、『われら共通の友』(Our Mutual Friend) のヘッドストーン (Headstone) とライダーフード (Riderhood) に関するL・レイン・ジュニア (Lauriat Lane, Jr.) の分析が概ね当て嵌まるように思われる。レインは、ヘッドストーンの人格の分裂が示されながら、また一方で、抑圧された人格の外在的ダブルとしてライダーフードが設定されていると指摘している (52)。つまり、ピップとオーリックの場合も、一方で、ピップの二重性が示され、また一方でピップの隠された自己がオーリックにおいて顕在化している、と見做すことができる。勿論、ヘッドストーンのように、克明に善と悪の相克が描かれているわけではない。しかし、異常なまでに罪悪感に苛まれる様子は、ピップの心の闇を想像せざるをえない。精神の秩序は、制御できない混沌に脅かされているという訳である。言わば、心の中に異人が存在するのである。

ピーター・ブルックス (Peter Brooks) は、物語冒頭のピップの状況を「コギトの序曲」(“the prelude to Pip’s cogito”, 116) と呼び、疎外され (孤児であること)、非権威付けされ (父親の不在)、自己命名していること (名付けられていない状態) (117)、つまり、ゼロの状態、始原的状态にあることを指摘している。言い換えれば、いまだ秩序化されていない状態、混沌の海に漂っている状態であると言える。しかし、すぐ後の「物事の同一性^{アイデンティティ}についての鮮やかではっきりした印象」、その認識の対象 (墓地、沼地、川、海)、そして「怖くて、震えて、泣いている小さなかたまりがピップであった」から (3-4)、コギトが訪れつつあることが想像できる。何よりも、自らを「ピップ」と対象化するその視点、自分を見る自分という二重的存在性の意識がコギトの瞬間を兆していると考えられる (この視点は語り手のものというより、原体験の再現だと考えたい)。この近代的自我の発現の示唆から、すでにこの時点で、ピップの二重性を確認できるのではないか。その後も、ピップは絶えず、自分の中の自分という感覚に付きまといられている。例えば、「覚えのなかったことを思い出す」(“recalling what I hardly know I know”, 21) や、「見ていると知らずに見る」(“I saw without then knowing that I saw them”, 31) といった言葉から、自分の中の統御できない自分の存在、無意識の存在への意識が芽生えていることがわかる。そして、マグウィッチの便宜に応じてから「罪悪感」(“guilty mind”, 17) に苛まれ、⁷「良心は抑圧され」(“my oppressed conscience”, 17)、ついには「私と私の良心が姿を現す」(“I and my conscience showed ourselves”, 22) 事態となる。正に、ウィリアム・ウィルソンのドッペル

ゲンガーの様相である。しかし、何よりもピップの別の面を見ることができるのは、ハーバート (Herbert) との決闘の場面である。ピップは、弱いハーバートを「打てば打つほど、より激しく打ち」(“the more I hit him, the harder I hit him”, 92)、勝利を収め、「陰鬱な満足感」を覚え、自分を「残忍な若い狼か、野獣」(“savage young wolf, or other wild beast”, 93) であるかのように感じている。通常のピップは、特にミセス・ジョー、エステラ (Estella) との関係において、肉体的にせよ、或いは精神的にせよ、被害者の立場にいる姿を明らかにしている。ピップを泣かせたことに思わず喜色を浮かべるエステラがサディストだとすれば (62)、そんなエステラを愛し抜くピップは、やはりマゾヒストだということになるだろう。事実、ミス・ハビシャム (Miss Havisham) は、そんなピップに対して、次のように言う。

“I’ll tell you,” said she, in the same hurried passionate whisper, “what real love is. It is blind devotion, unquestioning self-humiliation, utter submission, trust and belief against yourself and against the whole world, giving up your whole heart and soul to the smiter—as I did!” (240)

「打擲する者に身も心も委ねること」とはいかにも凄まじいが、ミス・ハビシャムは、明らかにピップの中に自分との同質性を認めているのである。⁸しかし、このようなマゾヒスティックな傾向に対して、上述したハーバートとの決闘の後の様子、「若き狼」と化したピップは明らかに異質であり、むしろ、全く逆のサディスティックな性向を見て取ることができる。おそらく、これは最もオーリックに接近した瞬間だと言えよう。後に、石灰窯で対峙したとき、オーリックがピップのことを何度も「狼」(425他)と呼んでいるのは、単なる暗合だとは思えないのである。また、オーリックは事実上の殺人者であるにも関わらず、結局死刑に処せられることがなく、窃盗の罪で監獄に入れられるだけというのは、やや腑に落ちない点である。しかし、オーリックがピップの第二の自己を表すのであるとするならば、いまだ影は完全に消え去っていないが、秩序化が一先ず成功しているということを表しているのかもしれない。

ピップにはまた別の二面性を見ることができる。ピップが自ら「自分自身との奇妙な争い」(“the singular kind of quarrel with myself”, 128)と呼ぶこの自己矛盾は、鍛冶屋か、紳士か、という二者択一の問題である。勿論、遺産相続の知らせ以前においては、紳士という選択肢はたんなる欲望にすぎず、鍛冶屋の選択はその欲望を抑える現実認識である。つまり、フロイトに倣って言えば、快感原則と現実原則の相克ということになろうか。そして、その欲望が醸成されたのは、サティス・ハウスという影の世界においてである。この日の光を遮断した奇妙な館は、ピップの欲望を際限なく増幅させる、言わば欲動の貯蔵庫たるイドの世界そのもののように思える(その意味でも、この屋敷の門番がオーリックであることは、極めて示唆的である)。この影の世界で生み出された欲望は、遺産相続の見込みの到来によって、さらに膨れ上がり、ジョーの世界

の存在は封じ込められ、隠蔽されていく。しかし、ジョーとの対面が、ピップに紳士階級という表層の下に労働者階級という深層が隠れていることを嫌でも思い起こさせる。ジョーが、ピップを「サー」(Sir)と「ピップ」の両方で呼びかけるとき(223)、ピップの二重性がより浮き彫りになる。勿論、表層を飾ること、すなわち、当時のキーワードで言えば、リスベクタビリティの仮面を被ることは、ピップに限らず、マシュー・ポケット(Matthew Pocket)、ベントリー・ドラムル(Bentley Drummle)、そしてコンペysonなどの人物にも関係する問題である。しかし、ピップにおいては、不自然に二つの階級が接合されている。つまり、当時の社会構造において、紳士階級が中心の秩序に位置し、労働者階級が周縁の混沌に位置付けられているとすれば、ピップは、中心にも、周縁にも存在することになる。勿論、この落ち着きの悪い二重性の元凶はマグウィッチであり、そして、この二重性に解決をつけてくれるのもマグウィッチなのである。

ピップとマグウィッチの振れた関係は、「フランケンシュタイン」の比喩との関連で説明することができる。物語中、メアリー・シェリー(Mary Shelley)の『フランケンシュタイン』(*Frankenstein*, 1817)を暗示する箇所を二つ確認できる。一つ目は、ピップが召使の少年ペッパー(Pepper)を雇ったとき、「洗濯屋の一家の滓からこの化け物("the monster", 218)を作り上げた」と述べ、さらに彼を「復讐の亡霊」("avenging phantom", 218)と命名している箇所である。(後に、"the avenger"に改変されている。225他)明らかに、『フランケンシュタイン』の物語展開(つまり、怪物が自らの創造主であるフランケンシュタインに恨みを抱き、復讐者として彼を追い詰めていく、というもの)を準えたものであろう。この準拠には、階級的力関係が含意されており、当然、ピップが主の側、ペッパーが従に位置している。二度目は、マグウィッチとの関係において言及されているが、再訪したマグウィッチに真相を教えられ、正に現実原則が勝利し、ピップの紳士という薄い膜が剥がされたその後にこの言及がなされている。

The imaginary student pursued by the misshapen creature he had impiously made, was not more wretched than I, pursued by the creature who had made me, and recoiling from him with a stronger repulsion, the more he admired me and the fonder he was of me. (339)

フランケンシュタインと怪物、ピップとマグウィッチ、この両組を相似的に捉えることはできないのである。確かに、ピップはフランケンシュタインと同様、追いかける側であるが、あくまで創造主はマグウィッチの方であり、ピップは被創造物の側なのである。正に、下層階級と上層階級の混合物たるピップこそ、継ぎ接ぎだらけのフリークなのかもしれない。マグウィッチは昂然と「俺は紳士の所有者だ」("I'm the owner of such [a gentleman]", 321)と言明する。かつてピップがマグウィッチのことを「私の囚人」("my convict", 36他)と呼んでいたことを思い起こすと、この皮肉はより効果的に響いてくるだろう。この最後の逆転劇はまさしくカーニバルの逆様の世界を思わせる。祭りの君主が逆様の世界に君臨し、一時的な秩序の擾乱を行うよう

に、マグウィッチという周縁の異人が薄い秩序の膜を突き破り、混沌をもたらしたのである。⁹ そうなると、最初の出会いのとき、ピップが逆様に吊るされる場面が象徴的に思えてくるのである。しかし、この再度の逆さ吊りを経て、ピップの階級的二重性は解消され、変奏を伴ってはいるが、再び中心から周縁へと回帰していくのである。或いは、さらにより遠い周縁へと向かうのである。

IV

『フランケンシュタイン』の幾つかの場面は北極が舞台となっているが、この物語にも、一箇所北極への言及がなされている。「もし私が北極に行っても」という、パンブルチュック (Pumblechook) の情報網の広さを誇張したレトリックに使われているのだが (231)、これを書くとき、ディケンズはおそらくジョン・フランクリン隊の北極探検 (1845) での出来事を思い浮かべていたであろうと想像できる。全員が不帰の客となったこの悲劇には、さらにカニバリズムという扇情的な要素が付帯していた。¹⁰ ディケンズがこの事件に大きな関心を寄せていたことは有名だが、この物語にも、物語冒頭のマグウィッチのピップに対する脅しの中にこのカニバリズムを見ることができる (4, 5, 6)。さて、ただ連想的に並べられたかに見えるこれらの表象は、実は全て帝国主義、コロニアリズムという問題に関わりがある。『フランケンシュタイン』の語り手の一人、ロバート・ウォルトン (Robert Walton) は北極において北西航路を探索しているのだが、ジョン・フランクリン隊も同じ目的であり、¹¹ 明らかに帝国主義の影が見え隠れしていると言える。また、怪物とマグウィッチは、コロニーにおける原住民、黒人の変奏として、カニバリズムは彼らの代表的な特徴として見ることができる。境界領域、異人のテーマは、十九世紀という新しい時代に入って、新たな展開を迎えているのである。

その意味で、マグウィッチは正しく新しい時代の異人の姿を表象していると言えるが、彼の中に三種のマージナリティを見ることができる。まず、英国国内における、搾取される労働者階級の代表としての姿である。オーリックと比較して、放浪者、境界領域の住人、犯罪者という共通項は確かに認められるが、異なるのはマグウィッチには子ども時代からの環境、背景が示されている点である。そこには、最下層の人々の困窮と不可避的な犯罪行為の実態を見て取ることができるが、留意すべきは、コンペysonとの関係において明らかな、上の階級からの搾取の様相である。マグウィッチは、コンペysonが彼を「黒人奴隷」(“black slave”, 350) に仕立て上げたこと述べている。つまり、グレアム・スミス (Grahame Smith) も指摘しているように、労働者階級 (特に子供) の搾取の問題は、原住民、黒人奴隷の問題と密接にリンクしていたのである (47)。国内と帝国の他者問題は密接に絡み合っていたのである。実際、物語中にも、ミセス・ジョーの蛮性を表す「ムガル人」(“the Mo-gul”, 49) というジョーの喩え、ミセス・ジョーが自らの不幸の喩えとして言及する「女性黒人奴隷」(“a Negress Slave”, 99)、ハーバートがエステラを喩

えた「韃靼人」(“a Tartar”, 176)、ウォブスルが芝居で扮した「忠実な黒人」(“a faithful Black”, 382)、「略奪の韃靼人」(“a predatory Tartar”, 383) など、日常生活の中に帝国主義に関わる表象が浸透している様子を窺い知ることができる。新しい異人に対して、まずその比喩に排除すべき他者性が刻印されるのである。そしてマグウィッチは生きた比喩である。そして、最後はホワイト・コロニー、オーストラリアに関わるマージナリティーである。オーストラリアが移民のための地域、そして流刑地であったことは、つまりはオーストラリアの問題が最初の労働者階級の困窮の問題の変奏にすぎないことを意味している。移民のほとんどは生活困窮者であり、下層階級こそ犯罪者の温床に他ならないからである。しかし、マグウィッチを通して見えてくるオーストラリアは、正しく監獄そのものである。E・W・サイード (Edward W. Said) は、マグウィッチの問題に触れ、次のように述べている。

[S]ubjects can be taken on places like Australia, but they cannot be allowed a “return” to metropolitan space, which, as all Dickens’s fiction testifies, is meticulously charted, spoken for, inhabited by a hierarchy of metropolitan personages. (xvi)

確かに、移民は帰国が許されているが (ミス・ペゴティーのように)、マグウィッチを通して見れば、本国の植民地に対する分節化の意識、ロンドンとオーストラリアの空間の分離を感じざるを得ない。ピップが川と言う境界線の向こうの海に「野獣の巣窟」を見たように、バルバロスを決して無くならないのである。かつて、共同体の境界である城壁に監獄を造ったように、帝国もまた広大な領土の果てに大きな監獄を造ったということである。コロニーは本国の影、境界領域なのである。

注

¹ ペンギン版の注によれば、ディケンズ (Dickens) の故郷チャタム／ロチェスターに近いテムズ河口のフー半島 (Hoo Peninsula) にあるクーリング・マーシュ (Cooling Marshes) がこの地のモデルとして考証されている (485)。

² 『ディケンズ・インデックス』 (*The Dickens Index*) は「クロス・キーズ」を次のように説明している。“Cross Keys,...situated in Wood Street, Cheapside, in London’s East End, the tavern was the terminus for Rochester coaches.” 因みに、駅馬車発着所を表す “terminus” は、同綴りのラテン語に由来し、境界、境界標の意味を持つ。元来はローマ神話のテルミヌスという境界の神に由来する言葉である。

³ ジグ踊り (jig) は16世紀に流行したダンスだが、しばしば道化と関連付けて考えられる。例

えば、S・ビルントン (S. Bllington) によれば、16世紀の有名な道化タールトン (Tarlton) はジグ踊りの名手として知られていた (35)。

⁴ 12世紀より始まるバーソロミュー・フェアは、1855年に完全に廃止された。ペンギン版の注によれば、ピップがロンドンに到着したのは、1823年7月という推定が示されている (485)。ということは、まだフェアは行われていたことになる (開催日は8月24日から3日間)。しかし、この箇所は執筆時 (1860-61) の視点から書かれているように思われる。

⁵ 中世ヨーロッパでは、「河川は冥府への入口であり、橋を通って死者が冥府に入るともかんがえられていたから、橋はたんに現世における人と人の絆であるだけでなく、人と彼岸を結ぶ絆であった」(阿部 33)。この物語には橋は登場しないが、この temple の階段、河畔の宿は同様のイメージの中に捕らえることができるように思われる。

⁶ 他のディケンズ作品と同様、この物語もスパイで溢れている。オーリックは本格的だが、群小のスパイとして、ミセス・ジョー (“a most unscrupulous spy”, 114)、復讐少年 (247)、ガーデンコートでの使用人 (327) などを挙げることができる。また、これに呼応して、監視社会の様相も顕著であり、ピップの常に誰かに見られているという強迫観念はこれを表していると言える。ハマムズ・ホテルの部屋の無数の小さな穴をアガスの眼に喩えている場面 (366)、夕方、ガス灯の赤い光の点灯を多くの赤い目玉と形容している場面 (388)、などにもこの様相を見ることが出来る。J・タンブリング (Jeremy Tambling) も、このピップの感覚は、フーコーのパノプティコン型社会に特有のものだと指摘している (31)。

⁷ M・P・ギンズバーグ (M. P. Ginsburg) は、ピップの罪悪感はマグウィッチとの邂逅に端を欲するのではなく、それ以前、ミセス・ジョーとの関係が源であることを論じている。その際、ミセス・ジョーは母親ではなく、父親の役割を果たしていると指摘している (117)。

⁸ ダグラス・スチュワード (Douglas Steward) は、マゾヒストとしてのピップを詳細に論じているが、ミス・ハビシャムはピップの分身 (“alter ego”) であると指摘している (39)。

⁹ バフチン (M. M. Bakhtin) は、「創造的理解」 (“creative understanding”) について次のように述べている。“In order to understand, it is immensely important for the person who understands to be *located outside* the object of his or her creative understanding—in time, in space, in culture”. (*Speech Genres* 7) これは正しく異人の視点である。そして、社会学者A・シュッツ (Alfred Schutz) も、彼の異人論の中で次のように述べている。“[T]he stranger... becomes essentially the man who has to place in question nearly everything that seems to be unquestionable to the members of the approached group”. (96) 中の成員にはわからないことも、外から来た者には見えるという訳であり、かくして異人が日常的状态に揺さぶりをかけ、自動化した秩序を掻き乱すことが可能なのである。

¹⁰ 1854年に全員死亡の宣告がされたが、すぐ後に、「最後に生き残った隊員たちは生き延びるために最後の手段 (カニバリズム) を取った」と報告され、英国国内に大きな論争が巻き起こっ

た (Marlow 650)。ディケンズは『家庭の言葉』においてこのカニバリズムの結論に反論し、キリスト教徒がそのような蛮行に走るはずがない、と主張した。つまり、カニバリズムは文明国と非文明国の境界を標す記号なのである。

¹¹ 谷田氏によれば、現実には、北西航路は貿易路になりえないことが判明していたので、「科学的知識の探求」という新たな動機が浮上していたようである (15)。しかし、『フランケンシュタイン』のアーケティック・サブライムにしても、この科学的知識の探求にしても、帝国主義と無関連に存在し得るとは思われない。むしろ、帝国主義を支える重要な要因ではないだろうか。

引用文献

- Bakhtin, M. M. *Speech Genres and Other Late Essays*. Trans. Vern W. McGee. Austin: University of Texas Press, 1986.
- Bentley, Nicolas, Michael Slater. and Nina Burgis. *The Dickens Index*. Oxford: Oxford University Press, 1990.
- Billington, Sandra. *A Social History of the Fool*. Brighton: The Harvester Press, 1984.
- Brooks, Peter. *Reading for the Plot: Design and Intention in Narrative*. Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1992.
- Dickens, Charles. *Great Expectations*. London: Penguin, 1998.
- Ginsburg, Michal Peled. "Dickens and the Uncanny: Repression and Displacement in *Great Expectations*". *Dickens Studies Annual* 13 (1984) : 115-124.
- Lane, Lauriat, Jr. "Dickens and the Double". *The Dickensian* 55 (1959) : 47-55.
- Marlow, James E. "English Cannibalism: Dickens After 1859". *Studies in English Literature* 23 (1985) : 647-66.
- Moor, Grace. *Dickens and Empire: Discourses of Class, Race and Colonialism in the Works of Charles Dickens*. Aldershot: Ashgate Publishing Co., 2004.
- Moynahan, Julian. "The Hero's Guilt: The Case of *Great Expectations*". *Essays in Criticism* 10 (1960) : 60-79.
- Said, Edward W. *Culture and Imperialism*. New York: Vintage Books, 1993.
- Shutz, Alfred. *Collected Papers II: Studies in Social Theory*. The Hague: Martinus Nijhoff, 1976.
- Simmel, Georg. *On Individuality and Social Forms*. Chicago: University of Chicago Press, 1971.
- Smith, Grahame. "Suppressing Narratives: Childhood and Empire in *The Uncommercial*

- Traveller and Great Expectations*". *Dickens and the Children of Empire*. Ed. Wendy S. Jacobson. Basingstoke: Palgrave Publishers Ltd., 2000.
- Steward, Douglas. "Anti-Oedipalizing *Great Expectations*: Masochism, Subjectivity, Capitalism". *Literature and Psychology* 45 (1999) : 29-50.
- Tambling, Jeremy. *Dickens, Violence and the Modern State: Dreams of the Scaffold*. London: Macmillan Press Ltd., 1995.
- Weinreb, Ben, and C. Hibbert. ed. *The London Encyclopaedia*. London: Macmillan, 1987.
- 赤坂憲雄. 『異人論序説』. 筑摩書房, 1992.
- 阿部謹也. 『中世を旅する人びと—ヨーロッパ庶民生活点描—』. 平凡社, 1978.
- エリアーデ, M. 『エリアーデ著作集第四巻 イメージとシンボル』. 前田耕作訳. せりか書房, 1994.
- 谷田博幸. 『極北の迷宮—北極探検とヴィクトリア朝文化—』. 名古屋大学出版局, 2000.
- 中西敏一. 『イギリス文学と監獄—18, 19世紀イギリス文学の一断面—』. 開文社出版, 1991.
- バフチーン, ミハイール. 『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』. 川端香男里訳. せりか書房. 1985.